

世界に貢献する日本人30

ニューズウィーク日本版

定価480円

Newspaper week®

昭和六十一年三月四日第三種郵便物認可

世界に貢献する
日本人30

本田圭佑

富永愛、國井修

杉良太郎、白川優子

鮫島弘子……

よりよい世界の力になる

日本人30人

2021

11・23

JICA 海外協力隊の都市計画職種でザンビアへ 人材育成への気付きが起業に繋がった

開発コンサルタントを目指し、青年海外協力隊としてザンビアに赴任した半井真明氏。その経験がどんな可能性を拓いたのか、国際ジャーナリストのモーリー・ロバートソン氏が話を聞いた。



**スマホは普及している
アフリカ・ザンビアへ赴任**

ロバートソン 最初に以前の経歴やJICA海外協力隊に応募した経緯について教えてもらえますか。
半井 大学で建築を学んだ後、日本の会社で都市計画コンサルタントに就任して従事。友人からJICA海外協力隊の話聞き、開発途上国で都市計画の仕事をしたかと思っ
ていました。偶然ザンビアで都市計画の職種で募集があったのです。

ロバートソン ザンビアと聞くと、怖気ついて「ほかの方どうぞ」と言ってしまうそうです。(笑)。第一印象はどうでしたか。

半井 首都のルサカは予想外に都会でした。空は青くて大地は赤く、現地の人が着ている服の原色が美しい。でも高層ビルが建ち、町はきれいに整備されているので不思議な気分でした。都市部では多くの人がスマートフォンを所有し、その後スマホ決済が急速に普及する土壌があったのも意外でした。

ロバートソン 先進国のようにまずは道路が整備されて、次に上下水道が通つてという段階的に開発が進むわけではなく、雨が降ったら通れなくなるような道が走っている村でも携帯電話の電波は飛んでいる状況ですね。活動はどんなことをされていたのですか。
半井 地方自治住宅省の北部州事務所に派遣され、都市計画を策定しました。関連したデータをデータベース化したり、CADやGIS(地理情報システム)の技術を教えたり。



半井真明
Masaaki Nakarai

1981年大阪府生まれ。室蘭工業大学大学院工学研究科修了後、都市計画コンサルタント会社を経て、2013年に青年海外協力隊としてザンビアへ。帰国後、開発コンサルタント会社で東南アジアなどで都市計画などに携わる。2020年に独立し、同じく協力隊経験者の雨宮知子氏と共同で神戸に合同会社CHEZAを設立。教育とスポーツを軸に、日本とアフリカを繋ぐ事業を展開している。

印象に残っているのは、タンザニアとの国境近くで行ったボーダータウンの開発。タンザニアに輸出する際に、通常はザンビア側で輸出手続き、タンザニア側で輸入手続きという2回のストップがあるのですが、これを1回で終わらせようというもの。周辺も開発していくという興味深いプロジェクトでした。

驚くほどの短期間で CADを身につけた理由

ロバートソン アフリカに限った話ではありませんが、開発途上国の都市計画というと、不透明性の高さなどもあって大変そうですね。スムーズに進みましたか。

半井 予算がなくて頓挫することは度々ありました。最初は日本式のスキームで考えていたのですが、現地のニーズに合わないのと、実行できる部隊がないので軌道修正。日本のように利便性の高い都

市計画ではなく、現地の人が維持管理できる身の丈にあった都市のあり方を考えるようになりました。
ロバートソン そうやって現地の人達に歩み寄り、落としどころを見つけていくわけですね。人材を育成するという視点で何か気付いたことはありましたか。
半井 一番重要なのは彼らにとっ



ザンビアの地方自治住宅省北部州事務所でGISの技術を指導。スタッフの収入が増えるというインセンティブによって、驚くほどのスピードで技術が習得されていた。



モーリー・ロバートソン
Morley Robertson

1963年ニューヨーク生まれ。日米双方の教育を受け、東京大学とハーバード大学に同時合格。東京大学在中にプロミュージシャンとしてデビュー。4ヶ月で東京大学を退学しハーバード大学へ。卒業後は国際ジャーナリスト、ミュージシャン、コメンテーター、俳優など、さまざまな分野で活躍。多くのメディアで仕事をすのほか、富山県氷見市の政策参与や観光親善大使なども務めている。

てお金になるかどうか。教える技術がすぐにお金に変わるような取り組みであれば、技術を習得するスピードは驚くほど早いです。例えばCADを習得できれば、自分の友人の家を設計することで、個人的な収入が増えるわけです。そのおかげで私のいた事務所の8割方はCADで設計できるようになり、その後の業務を効率化することができました。

自分の技術を彼らのために使うことに価値を感じるようになりまし。やがて人材を育成することがやりがいになったのです。

今の目標はルワンダでのスポーツアカデミーの設立

ロバートソン 半井さんが教えたCADで人生を変えるきっかけを掴んだ人もいたわけですね。

半井 そうかもしれません。私が教えたCADやGISの両方を習得して、その後イギリスの大学で修士号を取り、瞬間にキャリアを積んでいった人もいました。

ロバートソン 若くても専門的なIT技術を身につければトントン拍子で出世していく。開発途上国の場合、地下資源があればあるほど、富が公正に分配されずに逆に貧困になる国も多い中で、非常に珍しいケースだと思います。

半井 JICA海外協力隊の活動終了後も、こうした経験をした

と思い、その後も同じ道に進みました。日本で開発コンサルタントに採用されたのは協力隊の経験があったおかげです。その後、ミャンマーやベトナム、インド、ケニアで都市計画やインフラ国際協力の仕事に従事しました。

ロバートソン どの国も大変そうですが、最初の国がザンビアだったのがよかったのかもしれないですね。JICA海外協力隊の活動も含めた約10年で、さまざまな経験をされたと思います。ビジネスの相手が日本人だと楽でしょうか。

半井 むしろ逆ですね。日本ではルールを尊重するあまり、展開するスピードがすごく遅いんです。

ロバートソン 日本人はリスクを



2021年9月に神戸市で子供向け英語学習プログラム「GLOTTIS ACADEMY」を開校。関西在住のザンビア人が講師となり、運動神経が発達する36の動作を英語で指導している。

恐れて、チャンスが無駄にしても現状維持に固執してしまう。開発途上国でのビジネスを体験した人からは、悔しいという声をよく聞きますね。その後はどのような進路を選択されたのでしょうか。

半井 2020年にケニアから帰国し、スポーツと教育をテーマとした会社CHEZAを起業しました。日本人向けのGISオンライン研修や、筑波大学のTIA S 2・0（つくば国際スポーツアカデミー）との協働で青少年向けの運動能力測定プログラムの開発、子供向け英語スポーツ教室「GLOTTIS ACADEMY」の運営などを行っています。中期的にはルワンダにスポーツアカデミーを設立し、アスリートの育成や職業訓練を含む教育事業を展開することを目標としています。

ロバートソン 最後にJICA海外協力隊の活動を振り返って、改めて感じたことを教えてください。

半井 私自身、最も変わったのは本当の豊かさって何だろうと考えるようになったこと。都市計画は最先端の考え方が重視されがちなのですが、何をすれば現地の人の生活が豊かになるのか。その考えが人材を育成するという事業に繋がりました。自分の人生を変えるほどの濃密な2年間でした。

※対談は新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた上で実施しています。